

## 日本のアドラー心理学(2)

中島弘徳、服部宗和、鎌田 穰、岸見一郎、野田俊作

### 要旨

キーワード :

### はじめに

私達は、前回の国際個人心理学会で、営利目的でアドラー心理学を用い、一般の人々を操作しているある企業に関する問題を発表しました。彼等のアドラー心理学についての理解は、アドラー心理学の理論と思想に照らし合わせると多くの点で不適切でした。学会での発表には私達の予想を大きく上回る参加者があり、多くのアドバイスや質問をいただき、私達にとって大きな勇気づけとなりました。あれから 3 年が経ち、状況はかなり落ち着いてきています。そこで、今回は、今後の私達の展開について発表しようと思います。

### シカゴの国際学会において

シカゴにおける私達の発表に対して、世界中のアドレリアンから多くのアドバイスや質問をいただきました。そのなかのいくつかを以下にあげます。

まず、日本の状況について、「何をそんなに心配しているのか」という質問がありました。私達が、心配していたのは次のような理由からです。

まず、その企業の社長である I 氏は、テレビ等のメディアの利用がうまい人だということがあげられます。日本は、小さな国なので日本中どこでも同じメディアを見たり聞いたりすることができます。そのため、メディアの影響が大きく、誤ったアドラー心理学が放送されたりすると、これが一気に広がり定着する可能性がありました。そこで、彼らがメディアに登場するごとに学会から、理論的な誤り等を指摘した論文や手紙を送るという活動を行いました。メディアから直接返事が来たことはありませんでしたがメディアがアドラー心理学の扱いに慎重になった可能性は高いと思います。

もう一つの理由は、当時のその会社のニューズレターによると、カナダのアドラー・スクール・オブ・モンtréal との提携だけでなくシカゴのアドラー・スクールとの提携の可能性を表明していました。これは、彼らが日本以外のアドレリアンの名前を利用して自分達を権威づける可能性を示していました。つまり、その会社が、アドラー心理学の本場と提携すると、アドラー心理学を本のみでしか知らないような人々は、その会社の講師である S 氏の教える誤ったアドラー心理学でさえ、本当のアドラー心理学だと人々が考える可能性が高かったのです。これを止めるた

め、私達は、シカゴでの発表後も海外のアドレリアン達に、これは日本の国内問題であるので、中立な立場にいるようにと要請する等の活動をしました。その結果、その会社が発表していた計画は、ついに実行されることはありませんでした。

「法廷で、直接その会社と争い、決着をつけないのはなぜか」という質問もありました。私達が、法廷闘争を行わなかったのは、私達が問題としていたことは、あくまでもアドラー心理学に関する理論的、思想的な問題だったからです。こういう問題は法廷での論争にはなじまないと考えました。そこで、私達は学術論争という形で、学会誌や学会のホームページでアピールを続けました。この活動について、その会社から名誉毀損で訴えるという警告文がきましたが、学会は方針を変えずにいました。結局、告訴にはいたりませんでした。

さらに「アドラー心理学が普及するにつれて、いろいろな人が出てくるのはしょうがない。なぜ、そんなにこだわるのか」というような質問もありました。私達がこだわりつづけたのは、色々な人々が出てくることを止めることはできないでしょう。しかしアドラー心理学ではないものを、アドラー心理学と言って教えている状況を目にしたときにこれにこだわり続けて、ディスカッションを続けていくことが、アドレリアンの責任であると考えたからです。

## 日本での争点

日本では、1983年にアドラー心理学が紹介されてから、しばらくは、専門家中心で研究や普及が行われていました。しかし、その後かなり早い時期に、ムーブメントとしてアドラー心理学を実践する方向に転換し、活動を続けてきました。これは、日本における他の心理学派の専門家が、治療室や研究室で心理学を活用する機会が多いのと好対照を示していました。

ムーブメントとしてのアドラー心理学とは、すなわち、アドラー心理学の日常実践の重視、非専門家による地域活動の重視、アドラー心理学の基礎理論や思想の尊重と言えると思います。日常実践の重視とは、専門家も非専門家もアドラー心理学を日常生活においてまず実践しながら、アドラー心理学を身につけていくことを奨めるものです。理論的には、5つの基本前提に照らし合わせて、例えば「目的論的に物事をみる」「対人関係的に他者との関係を見直す」等です。そして、思想的には、「他者を援助して暮らす」「他者を支配しないで暮らす」と決心することと言えらると思います。最後に、技法は特に思想との整合性を保ちながら用いるということです。日本では多くの人々がこの実践を行ってきていました。日本で前回提起したような問題が起きたとき、多くの純粋なアドレリアン達は大変驚き、その後、多くの論争が始まりました。この論争を経験したことで、私達は多くのことを学びましたし、学会の指導者層のみならず多くの会員の、絶好の自己点検の機会ともなりました。

日本のアドレリアン、特にアドラー心理学の初学者からは、以下のような疑問が出されました。まず、「アドラー心理学は『他者と仲よくなるための心理学』であるのに、なぜ論争をするのか」という質問でした。特に、この質問は、I氏のもとでアドラー心理学を学んだ人から多くだされた疑問でした。彼等の主張をよく聞くと、「あなたのアドラー心理学理解のうち、Aの理解は、アドラー心理学の基本前提のBに照らし合わせて間違っている」と私達が述べたとすると、「あなたという人は、間違った人だ」という理解をしていることがわかってきました。その結果、今何を問題にしているかを丁寧に説明した結果、理解を得られました。その例として、「その会社のカウンセリングを受けたが、効果があった。だから、その方はすばらしいカウンセラーだ」と言った人がいましたが、私達は、「その方がすばらしい方で、カウンセラーとして技量があることは認めます。ただ、その方のアプローチやカウンセリングのゴールを考えると、そのカウンセ

リングはアドラー心理学のカウンセリングではないと思うのです」と伝えたところ、理解してもらうことができました。しかし、それでも「人と仲良くなる」ことのみを追求する人々は、結局学会を去っていきました。

また、いわゆる「政治的」動きがいやだという意見も多くいただきました。私達自身も、いわゆる「政治」には、疎いタイプが多く、はじめのうちは慣れない仕事に戸惑うことが多かったのです。しかし、「何か問題があれば、影に回って悪口をいうのではなく、論陣を張り、合法的な方法をとっていくこと」<sup>(1)</sup>とコルシーニが言っているように、こういうときに積極的に動くことがアドレリアンとしての責任と考え効果的な手段を模索し実行していきました。

## 発表後に私達が行った主な活動

ここまで述べましたように、前回の国際学会での発表後も、私達は様々な活動を行いました。例えば、引き続きモントリオールやシカゴへ働きかけを行いました。また学会のホームページはアドラー心理学を知らない人々をターゲットにするような内容に改定しました。この結果、ホームページを見て私達が行っている講座等へ参加してくださる方も増えてきました。さらに学会の法人化に向けて動きだし、学会の組織としての基盤づくりも始めました。

発表後の最大の活動の一つは、本学会の名誉会長であるシャルマン博士を招聘し特別講演をお願いしたことだと思います。この講演は、私達自身のアドラー心理学理解についての再自己点検になりました。さまざまの多くの精神医学理論、心理学理論、神経生理学に精通されているシャルマン先生がお話になるアドラー心理学は、アドラー心理学の理論を点検する絶好の機会でした。さらに、シャルマン先生の生き方そのものが、まさに私達がイメージしているアドレリアンそのもので、このことに多くの会員は感銘をうけました。政治的にではなく、ひとりの学者、臨床家、そして家庭人として生きてこられたシャルマン先生は、多くのアドレリアンの専門家のモデルに見えました。

講演の最後に息子のシャルマン先生が、「私は父が直接アルフレッド・アドラーとドライカースに繋がっていると思います。この流れを通じて、野田先生を通じてアドラーへとさかのぼる直系の流れから、日本は恩恵を受けてきたのだと思います」<sup>(2)</sup>とまとめてくださいました。これは、私達が学んできたことが間違っていなかったことが確認できる機会となりました。

このような活動を続けた後、S氏がその会社との関係を解消され、S氏は独自の心理学を展開されるようになりました。I氏からは、学会に対してすみわけの提案が出されました。I氏は、その後もアドラー心理学を教えています。基本的には彼の方針は、「アドラー心理学の専門店」から、アドラー心理学だけでなく他の心理学も扱う、「心理学のデパートメントストア」という状態になってきているように思います。この結果、アドラー心理学を学びたい人々が私達を選ぶという可能性が高くなっていると思います。

このように、私達が継続的に運動を続けた結果と、さらに海外のアドレリアンのサポートによって私達の運動が実り、3年前に一番問題となったことは解決しつつあるのです。

## 今後の展開

今後は、

- 1 : 学会の外で間違っただララー心理学を教えている人たちへの対応
- 2 : 出版物やメディアの情報への対応
- 3 : 間違っただララー心理学を学んだ人への対応
- 4 : アドラー心理学を正しく普及していく手段
- 5 : 専門家の水準をどのように保つか

という5つの検討課題があると思います。

このテーマは、マナスターが20年も前にのべたことにも繋がると思います<sup>(3)</sup>。確かに、日本でも、心理学の他学派からは、アドラー心理学は閉鎖的であるといわれることがあります。それは、ムーブメントとして心理学を捉えるので、実践をするか否かの選択を迫られる部分があるからだだと思います。特に、専門家に強く迫るということで余計そう思われているのでしょう。

最近では、アドラー心理学を実践から学ぶことの有効性から、徐々に専門家からもアドラー心理学が認められつつあります。2002年の秋には、日本心理臨床学会という日本でもっとも大きい臨床心理学の学会でアドラー心理学がワークショップのひとつに選ばれました。さらに、教師や医師（精神科医、小児科医、内科医）のなかでアドラー心理学を日常生活で実践しつつ、仕事においても活用している人が増えてきています。

今までも学会やアドラームーブメントは、特に非専門家がゆっくり学ぶことに寛容でした。しかし、専門家や指導者は、アドラー心理学に対する責任の度合いも格段に重くなります。ですから、常に他者の批判にさらされていなければならないし、そこから進歩も生まれてくると考えています。その意味で、今後は私達こそが、より一層アドレリアンとしての研鑽を積んでいかなければと決心しています。

## 最後に

前回私達がいただいた世界のアドレリアン達からの勇気づけに感謝することを最大の目的として今回の報告をしました。アジアでアドラー心理学を実践している私達の報告が、皆様方に対して、少しでもお役に立つことがあれば最大の喜びです。

(1)野田俊作：岩井俊憲氏の批判に答える．アドレリアン：19,1999.

(2)バーナード・シャルマン：アドラー心理学の基礎．アドレリアン 15(1)：31,2001.

(3)Manaster,G.J.：Adlerian Theory and Movement,Individual Psychology 43(3)：280-287,1987.

## 更新履歴

2012年12月1日 アドレリアン掲載号より転載